

LIVES OF THE ENGLISH POETS

I

研究社英文學叢書 (126)

詩人傳 I (ミルトン)

出文協承認ア 90402 號

定價 金貳圓
特別行爲 六錢
稅相當額 六錢
合計 金貳圓六錢

昭和十八年 四 月 廿五日 初 版 印 刷

昭和十八年 四 月 卅日 初 版 發 行



註 釋 者 福 原 麟 太 郎

發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎
東京市麴町區富士見町二丁目一番地

印 刷 所 研 究 社 印 刷 所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地
印協東東一六

東京市麴町區富士見町二丁目一番地
發 行 所 研 究 社

電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番
文協會員番號 109505 番

配 給 元 日本出版配給株式會社
午用紙規第六號東京府規格外許可

は し が き

Doctor Johnson の *Lives of the Poets* は詩人論としてまた詩歌の臨床批判として、文學にたづさはるものゝ必讀の書である。わが國では元來 Macaulay の詩人論を愛讀する例であつたが、今日この選集が上梓されうる機運に至つたことは、わが文運の進歩といふべきである。こゝに選んだものは Milton, Dryden, Pope 三篇であるが、これらは孰れも作者の最も力を注いだ、代表的な、而も全詩人傳中での長篇のみを取つたものであつて、World's Classics 版二卷の *Lives* 971 頁で五十二人の詩人を扱つてゐるうち、この三詩人が 323 頁を占めてゐるのであるから、ざつと全體の三分の一を收容したことになる。讀者はこれらの他に Cowley, Addison, Congreve, Savage, Swift, Collins, Gray などを一讀せられんことを希望する。

本選集の text は World's Classics 版によつた。Johnson 略傳及び *Lives* についての解題は文學士柴崎武夫君を煩はした。年譜及び書目は私がつけ足したものである。註釋はこれも柴崎君の書いてくれられたものを基として私が書き足した。その書き足しの爲に豫定の期日と頁數とを遙かに超過したことを意に介せず、その出版を敢行された研究社の好意は、柴崎君の良心的な助力と共に銘記すべきものである。柴崎君はいま軍務に馳驅しながらこの書の發刊を待つてくれてゐる。

この *Lives* は元來一冊として刊行さるべき筈であつたが、以上のやうな次第で意外に多數の頁を占めるに至つたため、急に餘儀なく上中下三冊として發行することになつた。その爲、略傳、解題、年譜及び書目は上 (*Milton*) にのみつけ、中 (*Dryden*) 下 (*Pope*) には私が近頃「新潮」及び「英語青年」に發表した二つの Johnson

論をその代りとして一つづゝ轉載した。その他各冊にその内容梗概を添へたが、この部分は解題の一部として柴崎君の纏めてくれたものを三つに分けたものである。

この書によつて Johnson の三詩人觀を十分理解しその批評方法を細かに學び得るためには、Milton, Dryden, Pope の詩集を傍に持つてゐることが必要である。Globe Edition や Everyman's Library で間に合ふ。Dryden の場合には戯曲が引用されてゐるので、詩集だけでは足りないが、戯曲集は流布本として Mermaid Series の二冊があるばかりである。(The Conquest of Granada, Marriage a la mode, Aureng-Zebe, All for Love, The Spanish Fryar, Albion and Albanus, Don Sebastian を含む) また、English Men of Letters Series (Milton by Mark Pattison, Dryden by G. Saintsbury, Pope by Leslie Stephen, Johnson by Leslie Stephen) や英米文學評傳叢書 (Milton 齋藤勇、Dryden 竹友藻風、Pope 酒井善孝、Johnson 石田憲次) などを備へて置かれゝば一層興味を深められるであらう。Johnson その人に關しては、書目の中にあげた諸書のうち特に Boswell's Life of Johnson (Globe Edition) や W. Raleigh の Six Essays on Johnson が面白く、又 J. Bailey の Dr. Johnson and his Circle (Home Univ. Lib.) や石田博士の「ジョンソン博士とその群」(研究社)、Leslie Stephen: English Literature and Society in the Eighteenth Century, 夏目漱石「文學評論」などはその時代を知るに有益な書である。わが國で早く Johnson の評傳を試みた人は、のちの魯庵、内田貢氏であつて、民友社の十二文豪叢書に號外として明治二十七年「ドクトル・ジョンソン」を書いてゐる。

昭和十六年十月三十日

福原麟太郎

INTRODUCTION

I. JOHNSON 略傳

Samuel Johnson は、1709 年九月十八日英國 Stratford 州東南部の都會 Lichfield に生れた。父は Michael Johnson といふ本屋で、學識・才能もかなりあつたらしく、その町の長官をしたこともある。母は Sarah Ford と云ひ、宗教的な賢夫人であつた。Samuel には弟もあつたが、早く死んでしまつた。彼は子供の時から、體も頑健で目鼻立も整つた少年であつたが、幼い時瘰癧にかゝつて顔面筋肉がゆがみ、あまり見よくない顔になつてしまつた。目も一時は片方が殆ど見えなくなり、他の方も視力が極めて不完全であつた。その當時瘰癧は國王の手に觸れて貰ふと治ると云はれて居たので、兩親は彼が三才の時、彼を連れて遙々 London に出て、Anne 女王に觸れて貰つた。然し瘰癧は治らなかつた。彼が一生を通じて Tory であり、尊王家であつたのは、この時の女王の恵みの思ひ出が大きな力をなしたのであらうと信ぜられて居る。彼は頑健な體を持ちながらも一生部分的な病氣に悩まされた。豪放大膽で權勢に恐れず、何事に限らず人に負けるといふことの嫌ひな反面に、神經質で涙脆く、弱い者の肩を持つといふ風な屡々矛盾した彼の性格は、多分にこの肉體的なものの影響を受けて居らしい。

1716 年、町の Grammar School に入學した。その頃から既に親分的な色彩を發揮して、登校するにも、近所の友達が數人で肩を組んで學校まで彼を乗せて行つたと云ふ。學業は又素晴らしくよく出来て、特に彼の暗記力は非常に驚くべきものであつた。

1724 年、學校を卒業してから二年間程は實業の手傳ひをして居たが、その間に店の本をあるに任せて無暗に讀んだ。そして彼の智囊はぐんぐん大きくなつて行つた。

その頃父の商賣は餘り香しくなく、とても彼を大學へやる餘裕はなかつた。然し幸にも近所に學資を出して呉れる人があつたので、1728 年 Oxford の Pembroke 學寮に私費生として入學した。Oxford では入學の最初から、彼の廣い學殖は教授達を驚かすに足る程のものであつた。然し學資は豊かでなかつたので、服裝も至つてみすぼらしく、中々人並の眞似はして居られず、そのため仲間笑者になるといふ有様であつた。然し Johnson は自分が弱い者であるとして他人に憐みをかけて貰ふといふことが極度に嫌ひであつた。負けじ魂といふのは彼の一生を通じて何時も目につく著しい特色をなして居た。

大學に居る時 Pope の *Messiah* を Latin に翻譯した。それ程優れたものではなかつたけれども、愛好する者も多く、Pope 自身も喜んで讀んだといはれて居る。

その中に學資も續かなくなつてしまひ、1731 年の秋終に何らの學位も得るに至らずして大學を去らねばならなかつた。

彼は再び Lichfield に歸つて來た。その年の冬、彼の父は二十磅の遺産を残して死んだ。それから後の約三十年間は、常に貧乏と闘ひ續けねばならない苦しい時代が續いた。何かして生計を立てねばならず、Leicester 州の grammar school の代用教員をしたこともあつたが、平凡にして味氣ない教員生活が彼の性に合ふ筈もなく、直ぐにやめて、Birmingham に行き、雜文を書いて少し許りの金を得た。この町に居る時、Latin の「アビシニヤ紀行」(*Voyage to Abyssinia*)を翻譯出版した。

このやうな頼りない生活をして居る時彼は戀愛をした。相手は Elizabeth Porter といふ未亡人で、彼の年程もある子供を持つて居

ようといふ彼よりずつと年上の女で、而も感心する程の器量でもなし、五分も厚く白粉を塗つて、派手な着物を著た女であつた。然し何處かに彼の心を捕へるものがあつたのであらう、二人は強く愛し合つて終に 1735 年結婚した。彼の愛は一生變ることなく、Elizabeth が彼に先立つてこの世を去つた時の彼の悲しみは非常なものであり其後も一生獨身を通して、折ある毎に亡妻を思出しては懷んで居たのであつた。彼の書簡集や *Prayers and Meditations* を讀む者は、必ず彼の妻に對する愛情に心を打たれるであらう。

さて彼は結婚後一層生計に悩まされ、妻の出資で Lichfield の近くに私塾を開き、生徒を募集した。募集に應じた者が三人あつた。後に有名な俳優となり、Literary Club の一員となつた David Garrick がその一人であつたことは誠に奇遇であつた。然しこんなことで田舎に埋れて居られる Johnson ではない。1737 年青雲の志を抱いて、少し許りの金と、その頃書きかけて居た悲劇 *Irene* の原稿とを持つて妻を残して London へ出かけた。その時 Garrick も法律を研究しようとして Johnson のお伴をして London へ出た。

然しその頃の London は文學を以て身を立てるには最も不適當な時期であつた。その以前は文筆に秀でたものは貴族や政府要人の庇護を受け、少くとも年金位は與へられ、若し政治にでも關心を持つて居れば議員、大使、大臣にでもなれるといふ華々しいものであつた。Addison, Swift 等はその著しい例である。然し文學も次第にかゝる位置を失ひ、Pope 一人を例外として文人は最も恵まれぬ状態に置かれて居た。従つて London へ出て來たとて直ぐに文筆で身を立てるといふやうな事はとても思ひも寄らぬことであつた。彼は極度の貧窮に落ちてしまつた。Harry Hervey といふ人が彼に同情して援助し、時々御馳走にも招いたりして呉れたのでどうにかやつて行くことが出来る始末であつた。Hervey

の親切は後に至つても決して忘れられないものであつた。

こんな生活が一年も續いた後幸運にも Cave といふ本屋の親切で、その當時最大の雑誌である *Gentleman's Magazine* に寄稿することが出来るやうになつた。彼はこの雑誌に議會記事を書いた。その當時は議會記事をそのまま雑誌に載せることは許されず、議會内のことも詳細には解らなかつた。そこで彼は議事に就ての一寸したヒントを他人から得ては自分の想像で演説を作り上げ議員の名も匿名にして寄稿した。それが又非常に好評を博して、London の人々は到る所でその雑誌を中心にして議會のことに就て論じ合つた。

この仕事を得て數週の後、1738 年五月、London といふ長詩を無名で出版した。これは Juvenal の第三諷刺詩 (*The Third Satire*) の構想を模し、當時の London の世相を諷したものである。非常に世人に歡迎され、作者は誰かといふことが問題になり、當時文壇に君臨して居た Pope の作ではないかとまで云はれた。Pope もこの詩を賞讃し、間もなく作者の名が發表された時、Johnson に非常な好意を示した。但しこの二人は一度も顔を合せたことはなかつたらしい。

1744 年 *Life of Savage* を出版した。Richard Savage はその頃 Johnson が交つて居た中で最も風變りな男であつた。伯爵の子として生れながら、恵まれずして靴屋の弟子になつたり、或時は牢獄にぶち込まれたりして人生の凡ゆる面を経験し、文筆を持つても満足な生活をすることも出来ず、全く無頼の徒となり果てて、終に 1743 年 Bristol で獄死したのであつた。Johnson は彼と共に貧困を味ひ、食もなく一晩中、文學、人生を論じながら London の町をうろつき廻ることもあつた。「Savage 傳」は傳記として極めて興味あるもので、疑ひもなく彼の傑作の中に數へらるべきであらう。これは後にそのまま「詩人傳」中に加へられた。

その後の三年間は別に重要な仕事もしなかつたが、ただ Shakespeare 研究の序として 1745 年 *Miscellaneous Observations on Macbeth* を書き當時 Shakespeare 研究家として知られて居た William Warburton (1698-1779) に大いにその天才的才能を認められた。かくて次第に彼の名は文壇でも認められて來たので、1747 年數名の著名な出版業者が合同で彼に英語辭典 (*A Dictionary of the English Language*) の編纂を委嘱した。彼は 1,500 鎊を出版業者より得て、數人の助手を備つてこの事業に取掛つた。そこで辭典編纂の趣意書を公にして、これを Earl of Chesterfield に dedicate した。Chesterfield 卿は當時政界で大いに巾を利かせて居り、大臣もして居たのであつたが、文學にも相當理解を持つて居た。然し極めてみすばらしい服裝をし、貴人の前に出ても決して上品な作法もせず、御馳走が出れば物も云はず額に青筋を立ててガツガツと食ひつくといつた風な野人 Johnson を家に招待して客間中を引掻きまはされることを迷惑にでも思つたのであらう。卿は數ギニーの金を與へて體よく Johnson に門前拂を食はしてしまつた。憤慨した Johnson は、よしそれならば獨力でやつて見せるぞといふので、大いに勉強した。始めは 1750 年一杯には仕上げる積りであつたが實際に完成されたのは 1755 年であつた。そしてこの七年の間、仕事の退屈を紛らすためにもつと氣に合つた仕事もした。

それは 1749 年に出版した *The Vanity of Human Wishes* といふ Juvenal の *The Tenth Satire* を模した諷刺詩であつた。これは前の *London* にも優る出來榮であつた。

この詩の出版後間もなく、彼が *London* を出る時に持つて來た *Irene* が、David Garrick によつて上演された。Garrick は當時既に當代隨一の名優で又 Drury Lane 劇場の名支配人となつて居た。然し流石の名優を以てしてもこの劇は全く失敗に終つた。上演に適して居ない許りか唯讀んでも面白くもない劇だつたのである。

但し Johnson はこれによつて 300 磅を得たので非常な喜び方であつた。

これから約一年程した後、1750 年五月から週二回出版の新聞 *The Rambler* を出し始めた。これは Addison と Steele とで出した *The Tattler* 及び *The Spectator* に模したものであつた。道徳、風俗、文學等を論ずる隨筆で相當に愛好する者はあつたが、その眞面目さと重々しさとの爲に一般には餘り歡迎されず、部數もそれ程多くはなかつた。しかしこれが後に單行本となつた時は急に評判がよくなつて England だけでも彼の生存中に 13,000 部賣れたといはれる。

London に出て間もなく、彼は妻を連れて來て居たのであつたが、その妻が *Rambler* の最後となるべき number が出て三日して急に病のため此世を去つてしまつた。二人の間には子供はなかつた。彼の悲みやうは傍の見る目も氣の毒な程であつた。暫くはとも仕事の手につかなかつた。*Rambler* もこのために止めてしまつた。

しかし漸く氣を取直した彼は又仕事に精を出してそれから三年の後 1755 年終に七年の歳月を要した辭典が完成した。これは英國最初の立派な大辭典で、よく引合ひに出されることであるが、佛蘭西の Academy で辭書を作つた時は四十人の學者が四十年かかつてやつたのに、彼は獨力で七年間に作つてしまつたといふので、彼の精力と學識とが如何に大であつたかを證明するものである。この辭典は語源が不正確であるといふ缺點もあり、又語の定義に多少 Johnson 流の prejudice が見られる所もないではないが、全體として定義は的確で、引用も手際よく、流石に “Dictionary Johnson” の名を恥しめない大著である。今でもその時代の本を読む時には中々便利な辭典である。

さて愈々この辭典が公にされると聞いた Chesterfield 卿は、こ

れを自分に dedicate して貰はうといふさもしい心を起して、*The World* といふ新聞に二回に渡つて Johnson の辭典を賞讃する論文を匿名で書いた。しかし昔の仕打を忘れない Johnson はかの有名な手紙によつて、

“ . . . Is not a Patron, my Lord, one who looks with unconcern on a man struggling for life in the water, and, when he has reached ground, encumbers him with help? The notice which you have been pleased to take of my labours, had it been early, had been kind; but it has been delayed till I am indifferent, and cannot enjoy it; till I am solitary, and cannot impart it; till I am known, and do not want it. I hope it is no very cynical asperity not to confess obligations where no benefit has been received; or to be unwilling that the Publick should consider me as owing that to a Patron, which Providence has enabled me to do for myself.”

と云ひ、權勢に恐れず、云ひたいことをズバズバと云つてのける Johnson の面目を躍如とさせ、更に今迄兎角 patron の鼻息許りを窺つて居らねばならなかつた文學者のために、萬丈の氣を吐いたのである。

然し名聲は高まつても決して金銭的には樂にならなかつた。その後借金のために二回も拘留され、その度に友人 Richardson に救つて貰はねばならぬ程であつた。

1757 年 Shakespeare 集成を出すことにして豫約募集をした。募集に應ずる者が多かつたが、餘り性に合はなかつたと見えて中々仕事に取掛らなかつた。

1758 年 *The Rambler* の續きとして週一回 *The Idler* を書き始めた。熱心に迎へられ、購讀者も多かつた。これは二年間續いた。

1759 年故郷 Lichfield で母が九十歳の高齢で逝去した。彼は母には長いこと會ふこともなかつたが貧しい中にも常に母親に仕送

りをするのを忘れなかつた。彼は葬式の費用を作るために小説を書いた。たつた一週間の中に大速力で書き上げ、読み返す暇もなく本屋へ持つて行つて 100 磅を得た。これが *Rasselas* であつた。*Rasselas* は小説としては決して大變に面白いといふ程ではない。Abyssinia の王子と王女が「幸福の谷」を出て人間の眞の幸福を求めて諸國を旅行するが何處にも眞の幸福を見出すことが出来ず、再び「幸福の谷」に戻るといふ話で、別にまとまつた小説的な筋といふものもない。*The Vanity of Human Wishes* を散文にしたといふ程度で melancholy な彼の人生觀が一貫して居るに過ぎない。それだけに亦一種悲痛な感じが讀者の心を打つことも事實である。

然しこの小説は當時非常な評判で、國內はもとより、殆ど凡ゆる歐羅巴語に譯されて諸外國にも廣く歡迎された。

このやうに長い苦しい生活も終に酬ひられる時が來た。1762 年新王 George III によつて年金 300 磅を下賜されることになつた。辭典に於て “pay given to a state hireling for treason to his country” と自ら定義した年金を貰つて “a slave of state hired by a stipend to obey a master” になることは随分妙な氣もしたであらうけれども、これからの彼の境遇は一變した。もう金の必要に迫られてあくせくと筆を取らないでもいゝやうになつた。

然し未だどうしてもやつてしまはねばならぬ仕事が残つて居た。それは 1757 年に豫約募集をしてそのまゝ放つて居た Shakespeare 集成である。幾度かやらうと思ひながらもどうしても氣が向かず、幾度か怠惰な我と我が身を責めては見ても實行に移らず、午後の二時頃迄も寢て居ては朝の四時頃迄友達と話に花を咲かせて居るといふ風であつた。豫約者は彼を責める。1765 年 Churchill といふ人が *The Ghost* といふ詩を書いて豫約者を騙る惡黨だといつて彼を罵る仕末。やつと腰を上げた彼は、仕事に掛ると疾

風迅雷の勢、その年の十月 Shakespeare 集成を出版した。

この集成に對しては Macaulay は随分酷評を與へて居るが、然し Johnson の人生に對する深い洞察力は隨所に見られるし、*Preface* でも云つて居るやうに、誤つて居ると思ふ所は盡く訂正し、意味不明と思はれる箇所は出来る限り説明しようとし、どうしても解らない所は率直にそれを告白するといふ風な極めて良心的な校訂、註釋をして居る。その *Preface* は「集成」以上に有名なもので、Shakespeare を神の如く無暗に讃えるといふのではなく、缺點は缺點として指摘し、充分にその美點を認め、人生家 Johnson の、人生家 Shakespeare に對する深い理解を示し、Shakespeare 批評に於ける重要な mile-stone をなして居る。

年金を貰ふやうになつてからの Johnson は「作品は生活の必要に迫られなければ中々書けるものではない」といふ彼自身の言葉通り、ペンを取ることも少くなつた。彼の最も好み、そして最も得意とするものは談話であつた。それ以前からも一種の Club を作つて得意の辯舌をふるつて居たのであつたが、1764 年に The Literary Club を組織し、その中心となつて文學、藝術、人生を論じて居た。當時の文壇に於けるこの Club の位置は非常に重要なもので新刊の書物の賣行も Literary Club の批評によつて左右されるといふ程であつた。それも詩に於ける Goldsmith、繪畫に於ける Reynolds、政治、哲學に於ける Burke、歴史家 Gibbon、言語學者 Jones 等、當代一流の人物をその會員として居たことを思へば當然なことであらう。

この會員には又文學史上 Johnson と切つても切れぬ關係を持つ James Boswell が居た。Boswell は Johnson が最も嫌ひな Scotland 人であつたが、天才的に偉人を識別する才能を持つた Boswell は 1763 年 Johnson と相識るや彼の傳記を書く積りで、機會ある毎にその一舉手一投足も見落すまいとし、その會話も丹念に記録し、

Johnson の死後、Boswell の Johnson か Johnson の Boswell かと云はれる程に有名な *The Life of Dr. Johnson* を書いたのである。Johnson が Bailey の所謂 “A National Institution” になつたのは、何といつても Boswell のお蔭によるものである。

Club が設立されて間もなく彼は裕福な醸造業者 Thrale 夫妻と親しくなつた。彼等は非常に Johnson を敬愛し、Streatham の Thrale 邸には彼の爲に特別の室を與へて優遇し、彼は夫妻と共に Wales や Paris へ旅行するといふ風であつた。

彼は多くの時をこの Thrale 邸で過したのであつたが、Fleet Street には彼のみすぼらしい家があつた。そして其處には年寄つた貧しい盲目の女 Mrs. Williams とか、彼女に劣らず貧しい Mrs. Desmoulins、人生に疲れ果てた寄る邊ない賣春婦の Miss Carmichael、さては勞働者相手の藪医者 Levett などといふ人達を引取つて養つて居た。彼の親切に狎れて御馳走がないなどと却つて彼に不平を並べることがあつても、慈悲深い彼は何時も黙々として彼等の云ふに任せて居た。

1773 年 Boswell の熱心な勧誘によつて、かねて興味を持つて居た Scotland に共に旅行し、到る處で偉人的な歓迎をうけた。1775 年旅行記 *A Journey to the Western Islands of Scotland* を出版した。出版當時は文壇到る處でこの本が話題に上つた。

この紀行が出版された頃、英本國と北米植民地との間に税金問題で紛争が起り、内亂が勃發するやうな形勢になつて來た。政府では Johnson の雄辯を以て本國を有利に導かうと思ひ、彼は之に應じて *Taxation No Tyranny* といふ論文を發表した。然しこのやうなことは彼には不向であつて大した議論も出來なかつた。それで流石の文壇王も老齡と病氣のため衰へを見せたかと思ふ人もあつた。然しそれが大きな誤であることを證明する時期が來た。其最後にして最大の傑作「詩人傳」を書く時が來たからである。

そしてこの大作を最後として彼の文壇生活は終りを告げた。彼が最も恐れて居た最後の時が次第に近づきつゝあつた。1783年の六月に中風症に襲はれた。これは間もなく恢復したのであるが、やがて喘息に罹り日夜苦しめられた。伊太利に行つて療養しようかと思つたが、旅費のことも氣にかゝつた。友人が政府の年金を増額して貰ふやうに運動したが、それも思ふやうにはならなかつた。1784年の六月には Boswell が Scotland へ去つた。これが二人の最後の別れであつた。

この頃には彼の親しい友人達も、寄寓者達も次々に此世を去り、妻も子も居らず非常に淋しくなつてゐた。1781年には最も親切な Thrall 氏も逝き、Thrall 夫人は伊太利の音楽教師 Piozzi と戀に落ち、Johnson を冷遇し、1784年彼の忠告にも拘らず世間の非難を避けて手を携へて伊太利へ逃げて行つた。そこでの愉快的なクリスマスの音楽會の最中、彼女は Johnson の死を聞いたのであつた。

あれ程恐れて居た死ではあつたが、最後の時になると彼は實に心が平靜になり、生残つた親しい老友たちに見守られつゝ、その1784年十二月十三日苦しいことの多かつた七十餘年の生涯を終つたのであつた。

II. LIVES に就いて

Edinburgh の Martin といふ出版の會社で英國詩人集が出版された。London の本屋達四十人は、自分等の版權を守るために新版詩人集を出版することにした。そしてこれを Edinburgh の版よりも立派にするために詩人集の序文として、詩人達の簡単な傳記と作品の概評とを書いて呉れと Johnson に頼んで來た。1777年の Easter Eve のことであつた。もう七十歳にもなうとして居る Johnson は然しこの申出を快く引受けた。といふのは傳記は彼が

最も興味を持ち、最も得意とする文學の分野であつたからである。

更に過去の長い文壇生活と、新古文學の廣い研究とは、この歴史的な大記念塔を建立すべきよき準備であつたと考へられるかも知れない。特に Glub 街に於ける彼の交友は、王政復古以後の英國文人に關する私的な追憶、逸話を得る機會を多く得しめてゐたのであつて、この仕事こそ彼に最も適したものであつた。

1777 年直ちにこの仕事に取掛つて、翌年四月には最初の一部を出版し、その翌年の Easter Eve 迄には Dryden 及び Milton を書いてしまつて居た。1780 年には残りの部分を非常な精力を集中して書いて居た。Prayers and Meditations の 1780 年九月十八日の日附の所で、「私は未だ Swift と Pope を書かねばならぬ。Swift は丁度始めた許りだ」と云つて居る。

終りの頃には少し倦怠を感じたらしかつたが、同書の 1781 年四月十三日の所で “Sometime in March I finished the Lives of the Poets, which I wrote in my usual way, dilatorily and hastily, unwilling to work, and working with vigour and haste.” と書いて居る。つまりこれで「詩人傳」十卷が完了したのである。

「詩人傳」を書いた動機は決して彼の自然的な創作慾から出たものでなく、頼まれて書いたのであるが、それが丁度彼の傳記文學に對する興味と合致したためにその大部分は非常な熱心さを以て書いてしまつたのである。始めは極く簡単な傳記と概略の批評とにする豫定であつたのに、彼の詩人達に對する知識の豊富さと、Literary Dictator としての氣持とが、とてもそんなものでは満足出來ず、終に序文となるべき範圍を越えて、堂々十卷の獨立した著作となつてしまつたのである。

London 版の詩人集では、最初 Chaucer 以後の詩人を全て含ませる積りであつたのであるが、實際には Cowley 以前の詩人は除外されてしまつた。理由はよく解らないが、Raleigh 博士の所説